

# 突風及び降ひょうに対する農作物等の技術対策について

令和3年7月12日

農林水産部担い手支援課

千葉県では、12日夜のはじめ頃から13日明け方にかけて、局地的に雷を伴って激しい雨が降り、大雨となる所がある見込みです。大雨による土砂災害や低い土地の浸水、河川の増水、落雷や竜巻などの激しい突風、降ひょうに注意が必要です。

については、次の事項を参考に、技術対策を実施してください。

## 1 果樹

### <事前対策>

多目的防災網を点検し、被害の発生を未然に防止する。

### <事後対策>

#### (1) 薬剤散布

##### ア 葉や果実が損傷している場合

防除暦を参考にして、被害後2～3日経過時点で農薬を散布する（出来れば雨が降る前に）。なお、「幸水」では収穫が近づいているため、農薬の収穫前使用日数に注意すること。

##### イ 枝や幹に被害がある場合

直ちに枝や幹の損傷部に保護剤等を塗布する。塗布が遅れると傷の回復が悪く、枯れ込みが多くなる。被害面積が大きい場合は、被害程度の大きい園や「幸水」園を優先する（※折れた枝は切り返してから、塗布する）。

#### (2) 棚の保護

降ひょう量が多く、多目的防災網に積もった場合には、多目的防災網を切るなどして、棚を保護する。

#### (3) 収穫まで日数のある果樹の場合

##### ア 上記の対策に加え、下記の被害程度に応じて着果量を制限する。

**激甚園**（残存している葉の損傷が70%以上、または、落葉30%以上）

⇒ 全幼果を摘み、樹勢回復に重点を置く。

**甚園**（残存している葉の損傷が50～70%、または、落葉程度30%未満）

⇒ 被害程度に応じた着果量調節

- |   |            |       |                   |
|---|------------|-------|-------------------|
| a | 落葉程度30%の場合 | ……    | 平年の40～50%の着果量にする。 |
| b | ”          | 20% ” | …… 60～70% ”       |
| c | ”          | 10% ” | …… 70～80% ”       |

ただし、樹勢が低下している園では、被害程度に関わらず全幼果を摘む。

**中～軽程度の園**（葉の損傷はあるが、落葉はほとんど認められない）

⇒ 樹勢に応じて、着果量を加減する。

## 2 施設共通

### ＜事後対策＞

- (1) 突風や降ひょうによって施設が破損した場合は、ビニールの損傷箇所を早急に修理する。
- (2) 施設の損傷箇所からの強風の流入により株が傷んだ場合や、施設内への雨水の流入等により内部が多湿になる場合等で、病気の発生が懸念されるときには、防除指針に従い殺菌剤を散布する。また、薄めの液肥の葉面散布等により生育の回復に努める。ただし、根の活性が低下しているときは薬害を発生しやすいので気をつける。

## 3 野菜

### ＜事後対策＞

#### (1) すいか・メロン

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので、薬剤を散布する。特に、今後の天候によって以下の病害の発生が懸念されるので注意する（カッコ内は病原菌の生育適温）。

炭疽病（22～28℃）、疫病（28～30℃）、べと病（20～25℃）、つる割病（24℃）、褐色腐敗病（28～30℃）、菌核病（18～20℃）

#### (2) 食用とうもろこし

被害が軽度のものについては、葉面散布の実施や即効性の肥料を施用して生育の維持・再生を図る。

#### (3) ねぎ類

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。また、株養成期の畑は、追肥等の管理を適期に行う。

#### (4) 露地野菜一般（ショウガ、サトイモなど）

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので薬剤を散布する。草勢の回復を図るため、草姿に回復の兆しが見られはじめたら、葉面散布剤や速効性の肥料を散布する。

※農薬の使用に際しては、ラベルの表示をよく確認するとともに、最新の農薬使用基準を守って使用してください。

## 4 露地花き

### ＜事後対策＞

- (1) 風により折れた枝や株は整理し、倒伏した切り花類は枝の曲がらないうちに無理のない範囲で早く立て直し土寄せする。
- (2) 多湿により病気が発生しやすくなるので、防除指針に従い殺菌剤を散布する。

## 5 水稻

### ＜事前対策＞

(1) 排水路の詰まりの点検・補修を行い、冠水や滞水に備える。

### ＜事後対策＞

- (1) 水稻の生育は穂ばらみ期～出穂期にあり、長時間冠水（株全体が水につかる事）した場合は、水温が高いほど、また濁水によるほど被害が大きくなるので、早急な排水を行う。
- (2) 白葉枯病の常発地では、浸水（葉鞘や穂が水面から出ている事）、冠水した場合に発生する恐れがあるので、薬剤防除を行う。
- (3) これまでの天候でいもち病が発生している圃場が見られます。冠水した場合、感染が拡大する可能性があるため、必要に応じて薬剤防除を行う。

## 6 大豆

### ＜事前対策＞

- (1) 排水の悪いほ場では、あらかじめ排水溝などの整備をして、冠水や滞水に備える。特に水田転換畑では滞水しやすいので、排水溝を確実に排水路につなげる事や、畦畔を切る等で早急な排水対策を行う。
- (2) これからは種を予定している場合、出芽時や生育初期の湿害は苗立ち不足や初期生育が著しく劣ることになるので、天候の回復を待って圃場が乾いてから播種を行う。

### ＜事後対策＞

- (1) 生育中のほ場では、土壌が乾くのを待って、中耕・培土等により草勢の回復を図る。
- (2) 滞水した場合、その後に病害虫が多発する可能性があるため、発生に注意して防除を行う。
- (3) 冠水や滞水により、出芽時や生育初期に著しい湿害を受けた場合、まき直しも検討する。その場合、生育の遅れを補うため播種時期が遅くなるにつれて播種量を増やしていく。

## 7 落花生

### ＜事前対策＞

(1) 排水の悪いほ場では、あらかじめ排水溝などの整備をして、冠水や滞水に備える。

### ＜事後対策＞

- (1) 滞水した場合、病害が発生しやすくなるので、よく観察して必要に応じて防除を行う。
- (2) ほ場が乾くのを待って、中耕等により草勢の回復を図る。